

## 急速に姿を変える中間貯蔵施設

写真は東京新聞 1月23日朝刊「3・11後を生きる こちら原発取材班」。標題についてビジュアルに伝える。

リードから一東京電力福島第一原発事故に伴って発生した膨大な除染土は30年間、原発周辺に建設が進む中間貯蔵施設に保管される。その建設予定地は南北約8km、1600mに及ぶ。用地の確保が約85%まで進み、放射性物質で汚染された土の詰まった大型土のうを処理し、貯蔵する施設群が続々と建てられている。急速に変わりつつある状況を本紙へりからの空撮画像を中心に報告する。(山川剛史)

昨年7月に福島大学で開催された「原発と人権」集会で、山川記者の報告を聴いた。その時も福島原発の今をリアルに伝えるものであった。この写真を見ていると、昨年6月の福島第一原発の視察を思い起こす。国道6号(陸前浜街道)を富岡町から大熊町を経て、広大な原発構内に入った。原発事故現場を見た時の衝撃は、今も忘れられない。その途中で車内から、いくつかの中間貯蔵施設の建設現場を眺めることができた。

こうして空撮画像により原発地帯を一望すると、あらためて原発事故の重大さ、事故処理の膨大な時間とコストを痛感する。



(2019年2月11日)